専攻医の主張

# 私にできること

公立みつぎ総合病院　リハビリテーション科　品末　典也

卒後3年目、リハビリテーション科専攻医1年目の品末典也と申します。現在は尾道市にあります、公立みつぎ総合病院の回復期リハビリテーション病棟で勤務しています。私は東広島市黒瀬町出身で、当時地元の中学校に通っていた頃に「神様のカルテ」という小説を読んだことがきっかけで医師を志しました。「典也」という名前は「本をよく読むように」と名付けられましたから、名は体を表すではないですが、自分らしいかなと思います。高校は県立広島高校、そして広島大学医学部医学科を卒業し現在に至ります。

初期研修医を終え、今年度から初めて回復期で病棟主治医として担当患者を持たせていただいています。主な疾患として骨折や頚損なども診ますが、特に脳卒中後の患者を多く担当しています。しかし、一口に脳卒中患者といっても、麻痺でADL（日常生活動作）が低下した方もいれば、重たい失語が残っている人、高次脳機能障害がメインの人、体は元気なのに嚥下だけ全くできない人などさまざまでした。社会的に抱えている問題も十人十色であり、どうすれば早く、あるいはどこに退院できるか、逆にもっとリハビリを継続してもらうにはどうすればいいかなど、患者それぞれに対して工夫が必要なのだと考えさせられます。研修医の時には分からなかった、主治医としての目線に立って初めて気づかされることばかりです。ちなみに、昨年度は北部医療センター安佐市民病院で研修医として勤務させていただき、当直では多くの救急患者の診療にあたりました。全く異なる仕事に見え、研修医期間が少しムダに思われるかもしれませんが、回復期病棟といえども急変もする、救急当直にも入る、加えて入院患者も単一の疾患だけという方はほとんどいないわけですから、いろいろな疾患を診る上でも、研修医時代に学んだこと、先生方に教えていただいたことが活かせているかなと感じる日々です。

そんな中で、リハビリテーション科の役割や業務内容は他科の先生方からしたらよく分からないものではないでしょうか。私自身専攻医1年目という立場で、まだよく分かっていないというのが正直なところです。当科のルーツがもともと整形外科とあって、身体の動きを見ているのではと皆さまから聞かれることが多いです。一応、学問としてのリハビリテーション医学は身体機能や障害を診る学問であるといわれており、私は「できること」を増やす科であると解釈しています。歩行やトイレを始めとするADLの部分だったり、仕事や在宅への復帰だったりと人によってさまざまですが、疾患を治すだけではまだ難しいことがリハビリを経て可能になることがあります。「できること」が増えていくことは、患者自身としても実感しやすく、患者・家族の医療への満足度に直結する印象があり、私がリハビリに興味を持った理由の1つです。

これからも少しでも地域の患者、あるいは先生方の力になれるように業務に励んで参ります。まだまだ未熟ではございますが、今後ともご指導ご鞭撻（べんたつ）のほどよろしくお願いいたします。

Facebook更新中!
もみじ医が広島県医師会のイベント情報を
お知らせしています。
フォローして最新情報をチェックしましょう。